The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対話を通して「まちづくり」の課題を問い直す
Author(s)	前原, なおみ
Citation	臨床哲学. 2015, 16, p. 147-157
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51591
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対話を通して「まちづくり」の課題を再考する

前原　なおみ

1．はじめに

まちをつくるとは

現在の日本では、高齢者人口の増加に伴う孤立高齢者と認知症高齢者の増加、青年期や壮年期のひきこもり、いじめや児童虐待、災害への準備不足、福祉ニーズの多様化など様々な課題が顕在していると言われている。さらに地方都市では、就職難や職業継承者問題、定住者の減少と空き家の増加、伝統文化の伝承問題、観光時期や繁忙期とのギャップなどの課題が複合しており、すべての地域において地域福祉の再構築として「まちづくり」が課題となっている[1]。

私は、訪問看護師として従事したことがあり、地域で生活する高齢者が住みやすいまち、安心して暮らせるまちについて関心があり、地域福祉活動における情報ネットワークに関する調査を行ってきた。地域福祉活動とは、地域住民と福祉サービス提供事業者、専門職、行政が地域の課題を共有し、制度サービスにプラスして自分たちで安心して暮らせるような仕組みを作る活動であり、自助、共助、公助の連携によって地域の問題を解決していこうとする取り組みである[2]。調査を通じてひとがひとを支えるまちづくりには多くのひとが情報を共有し、支援を必要とするひとを早期に発見して支援の輪が広がることが必要であり、まちづくりとは、支援を継続的に提供できるネットワークや仕組みをつくるものであると感じてきた。

本報告は、大阪大学で開講されたコミュニケーションデザイン科目「観光まちづくり学実践論」で、大学生と大学院生が、富山県八尾市でフィールドワークを実施したことから「まちづくり」の課題について考えたことを対話を通して振り返ったものである。報告の特徴は、対象がフィールドワークをおこなった大学生および大学院生と教員であること。および、対話という手法を用いたことの２点があげられる。

都心で生活する大学生・大学院生が、地方都市における問題や課題を実体験する機会は少なく、まちやまちづくりについて感じたり考えたりする機会はさらに少ない。そのため、フィールドワークを行いながら対話することで、まちづくりに関して感じたことや考えたことに起こった変化が見えやすいと考えられる。

また、対話は、自分の考えや感じたことを言語化する必要があり、語ることによって追体験して頭でじっくりと考える機会となる。さらに、対話は共同行為であることから、同じフィールドで影響を受けている対象者間での相乗効果をもたらしやすいと考えられる。

私が、対話に関心を持ったきっかけは、大阪大学を拠点として対話促進のためのワークショップの場を提供しているカフェフィロが企画したものに参加したことであった。そもそも「哲学カフェ」とは、誰でもはいることのできるカフェを舞台に、気軽に哲学を楽しもうという企画であり、もとはフランスのマルク・ソテーという人物がパリで始めたものである。対話は、誰でも可能で、日常的な視点で物事をじっくり話すことができることから、私自身が看護師や医療者が対話することを目的とした会を開催してきたことも、今回対話を用いた理由のひとつである。さらに、対話は記録することが可能であり、一連のプロセスとその成果を振り返りやすい特徴があることから、対話をとおして学びをまとめる。

対話では、その土地で体験したことを受講生間で共有し、まちづくりの課題について「なぜ」や「何が」、「本当にそうか」という視点を持つことを大事にした。その結果、考え方の違いに気づいたり見方が変わったりする経験をし、まちづくりの課題を考え直す上で欠かせない視点を得た。そこで、1) 授業概要、2) 対話の実践、3) 参加者の感想、4) 対話で得られたこと、5) 対話から得られたことについて簡単な考察を加えて報告する。

2．授業の概要

1）授業の目的と参加者

「観光まちづくり学実践論」は、八尾の人びとと交流しながら、まちの人びとから八尾のまちについて総合的に学び、まちの課題や魅力、あるいはまちの在り方やまちづくりについて考えることを目的として開講されている。また、その体験から受講者自身の身近なコミュニティについて考えたり、感じたりすることも目的に含まれている。

授業は、大阪大学の全研究科大学院生および全学部生を対象にしたシラバスに掲載され、オリエンテーションに参加した大学生および大学院生のうち、全日程に参加可能で、かつ

志望動機が明確であった大学生３名と大学院生４名の計７名が受講した。

２）授業日程と内容

1）2014 年 4 月 15 日、16 日	学内 : 教員による説明と選抜、受講者の決定
2）4 月 23 日	学内 : 受講者顔合わせ、オリエンテーション、 目的と方法の確認、地域やまちづくりの特徴の学習
3）5 月 3 日 ~5 月 4 日	八尾町訪問
4）6 月 9 日	学内 : 訪問での感想や課題に関する意見交換
5）7 月 7 日	昨年度受講者からの情報収集
6）8 月 18 日～ 8 月 23 日	八尾町訪問・フィールドワーク
7）9 月 12 日～ 9 月 13 日	富山市県グランドプラザにて授業の成果発表

受講者は、訪問までに学内で訪問目的を明確にし、地域の特徴やまちづくりに関する意見交換を行った。また、昨年度受講者からの情報を得た後、計８日間八尾町を訪問し、フィールドワークを行った。

八尾町での活動は個人でおこない、その内容は以下のとおりである。

フィールドワークの具体例

〔八尾町町会訪問、八尾町住民宅の訪問、曳山祭り見学、富山市八尾山田商工会職員へのインタビュー、八尾市高齢者施設でのボランティア、おわら風の盆前夜祭見学、喫茶店や商店街・個人商店訪問、小学校教諭インタビュー、公民館視察など〕

３）八尾町の特徴

八尾町は、富山市の南部に位置した人口２万人余りのまちである。とりわけ旧町 (きゅうちょう) とよばれる地区は毎年９月に行われる「おわら風の盆」が全国的に有名で、かつては養蚕や和紙の生産で反映し、富山藩の御納屋・加賀百万石の隠し蔵とも呼ばれた経済力の豊かなまちであった。そのため、曳山祭りやおわら風の盆などの行事が活発に行われ、現在も住民の努力により多彩な伝統文化や情緒漂う街並みが残っている。

しかし近年は、人口の減少と高齢化、空き家問題、伝統文化の保存・継承問題、また観光時期のみに観光客がおしよせるなど、さまざまな問題を抱えている。そのため、富山市行政政策では、公共交通機関の増便や、駅舎外壁の塗装、ラッピング列車運行、駅のトイレ・駐輪場整備、地域とのイベント連携、「坂のまちアート」等イベントの創出、PR の強

化により観光客の増加を目指した企画が実施されている。

3．対話の実際

1）対話の目的と方法

対話は、自主的に集まった参加者がその日のフィールドワークの中で感じたこと、考えたことを共有することを目的として始めた。対話の時間と場所をあらかじめ受講生に告知し、対話を促進するために、大学院生１名が進行役を務めた。対話への参加制約はなく、テーマは、その日の活動内容の報告から、それぞれが気になった点について発言していく中で話し合いにより決定した。また、対話では以下の３点を共通理解として進めた。

① 参加は主体的に行い、しかし無理に発言する必要はないこと

② 他者の意見は最後まで聞き、全面的な否定や個人への批判はしないこと

③ テーマにそって、他者にわかりやすい言葉を用いて伝えること

2）対話の状況

回数	日時	参加者	テーマ
1	8 月 18 日 19:00~20:00	学生 6 名 教員 3 名	気づきの共有 意見交換
1	8 月 19 日 13:20~14:00	学生 6 名 教員 3 名	活性化とは
2	8 月 20 日 13:20~14:15	学生 6 名 教員 3 名	まちで生きるとは
3	8 月 21 日 16:20~17:15	学生 5 名 教員 2 名	まちらしいとは
4	8 月 22 日 16:20~17:15	学生 6 名 教員 3 名	自分がまちに住むとしたら

3）対話の内容

（1）まちで感じたこと

訪問初日は、八尾町で若者に出会わなかったことから寂しい印象を受けたり、商店では見られている気がして落ち着かなかったり、まち全体が整備されていることに違和感を覚えたことなど、参加者の生活との違いに困惑しているという意見が多く聞かれた。そして、考えたいことでは、１．まちの若者の現状や思い。２．テーマパークやイベントを開催すること。３．コンビニや総合商店を置くこと。４．人口減少や空き家問題に対して政策を導入することなど、まちの問題について考え、まちの発展方法を考えたいという意見が出された。

しかし、滞在するうちにまちのひとがいつでも挨拶してくれることや、話しかけても嫌な顔をせず、まちのひとからも話しかけてくれることなどを体験するにつれ、参加者の地元では顔見知りでなければ出会っても挨拶せず、喫茶店で隣に座っても話しかけないという距離を取ることが心地よく、儀礼的無関心が暗黙のルールであるという習慣の違いに気づきはじめた 。

印象的であったのは、まちに違和感があり、いわばこのまちの住民は「調教されている」と感じた参加者も複数いたがフィールドワークが進むにつれて違和感を覚えなくなり、小さい時からの社会規範による影響が自分たちにもあるという発言があったことであった。文化は生活や教育によって育まれ、儀礼的無関心は参加者にとっては居心地がよいが社会的にはよいことばかりではないという意見が聞かれた。

そして、参加者の生活を基準にまちづくりを考えてよいのかと疑問がわき、本当のまちの問題はなにかに関心が寄せられ始めた。さらに、まちの人びとの日常生活は起こっている問題とは切り離されているため問題を先送りにしているように見えたことから、問題はまちの内からは見えにくくなることを体験し、自分たちの固定観念でまちの問題に解決方法を見出そうとしていたことに気づき、まちは地域や時代とともに変化するものであり、住民が獲得していくものだと意見は変化した。

（2）まちの活性化について

対話では、まちの活性化とは未来に展望があることで、人口が減少していることや、伝統文化が縮小していることから、八尾町は活性化していないという意見が出された。

しかし、まちを歩き、まちのひとと話し、80 歳代女性宅を訪問したり、小学校教諭と話したりするうちに、まちに生活するひとは笑い、商店で集い、楽しみを持ちながら自分たちと同じように生活している事実から、まちの活性化は人口増加や文化の拡大と同じだろうかという疑問が投げかけられた。そして、日本全体の人口が減少する中で、八尾町だけが活性化することは可能であるのか、未来展望があることが活性化であると仮定するならば、日本のどの地域においても活性化自体は望めない課題であることに気づいた。

印象的であったのは、まちの活性化が時代に合わせて変化することであるならば、存在するコミュニティが衰退することや壊すことも活性化となること、数年以降に将来の結果が出て初めて活性化であったかどうかが決まること、あるいは、ひとは、見たくないこと、考えたくないことを考えないようにするため、現在の習慣を維持するのが人間の持ってい

る力であり、問題を突きつけること自体は活性化にはつながらないという意見が聞かれたことであった。

そして、現在のまちの活性化は、生活を楽しむこと、衰退する現象による影響を最小限に食い止めること、生活の安定を維持すること、現状を認識して何か行動すること、このままでいることも活性化ではないかと意見は変化した。

（3）まちに生きることについて

八尾町の伝統文化である曳山祭りを見学したり、住民の話を聞き、町会の絆や役割分担を目の当たりにしたりする体験から、まちに住むことに窮屈さを感じるという意見が出されていた。

しかし、毎年役割を行っているひとの誇らしげな表情や、絆があることで祭りが成立していること、まちのひとはまちで生きることに違和感を抱いていないこと、参加者自身も自分のまちに違和感がないことから、まちを選択して生きているひとはいるのかという疑問が投げかけられた。

印象的であったのは、特別に嫌なことがなければ、人間は消極的選択をする生き物であり、生活に問題がなければ、「このまちでいい」から「このまちがいい」となるのではないかという意見が聞かれたことであった。

そして、まち を選択して生活しているひとは少数派であり、婚姻や出生、仕事関係で生活の場は決まることが多く、まちを選択する優先順位は高くないと言う意見が出された。訪問開始時、参加者は「まちで生きる」ことに特別な意味を感じて息苦しさを感じていたが、何かを選んだ結果としてまちで生きていること、さらにその結果として、まちのルールや価値観、伝統への適応が必要で、受け入れたり、受け入れるふりをしたりしながら生きていることに変化した。また、まちは歴史や文化に規定されるが、その規定は時間とともに多様化し拡大していることから、そこで生まれそこで生きていると、それが当たり前となり息苦しさを感じにくいことに気づいた。

さらに、まちに生きるためには、集まる理由としての行事と集う場所の両方が必要であることに気づいた。つまり、いま (時間) とここ (場所) が結びついていることが、まちが維持力を高めてまちに生きることにつながっている。それは、まちは生活する者同士の相互作用により成り立っているという気づきにつながり、参加者は自分のまちに考えを波及させ始めた。自分は、自分のまちに積極的に関わっておらず、どのまちに住んでもまち

の影響を受けていないと思っていたが、自分が関わらないということで、まちからの関わりを受けないという相互作用が起きている 可能性に気づいた。

4．参加者の感想

対話に参加した学生からは、「その日体験したことを語りやすかった」「体験を共有できた」「テーマを決めて話し合うことで考えが深まった」「自分の意見を持ちやすかった」「ひとの意見を聞く機会になり新たな視点を発見できた」「面白かった」「ひとの持つイメージが大きく違うことに気づいた」という肯定的な感想が聞かれた。対話では、全員がその日の体験に加えて自分がその場で考えたことを他者にわかりやすいように伝える努力をしており、語ることと聞くことによって「問題」と見えていた事柄に対して違う視点が持つことができていた。また、自分の固定概念に気づき、考え方の枠組みを変えることで、その土地ならではの考え方から課題を理解しようと努力でき、その結果、対話の前後では、テーマの見え方が異なっているように感じた。

逆に、否定的なものとしては、「時間設定が中途半端であった」という感想が聞かれた。対話の時間を活動時間中に設定していたことから、活動を中断して参加した者もあり、時間設定に検討が必要であった。しかし、あらかじめ時間と場所を設定していたことで継続して参加することが可能となり、時間を調整して参加する主体性は評価できると思われた。

5．対話から得られたこと

対話は、知識や経験の有無に関わらず、だれもが参加できる。参加者は、対話の機会があることによって主体的に意見を交換し、それぞれの体験を共有する機会となっていた。そして、この対話を振り返ることにより、体験の共有とともにいくつかの効果を感じた。その効果について、以下にまとめる。

1）対話は、体験を再構成する

対話では、自分に起こった出来事や感じたこと、考えたことを他者に伝わるように言語化する必要があり、まず体験を想起する必要があった。体験の想起では、その時・その場で起こったことに対して、自分を主としてじっくりと感じ考え直し、他者に伝わりやすく

するためには、時間の流れを整理し、意味づけ、全体像から事象を再確認しようと努力していた。

さらに、テーマに沿って同じ体験や同じではない体験を聞いたりすることで、事象から時間を経て自分の身に起きたことや感情を振り返ることとなり、その時・その場では考えなかったことが見えてきたり、全体像がさらに膨らんだなかで事象を捉えることができた。それは、その事象に改めて自分を投入する体験であり、いくつかのまとまりのあるものと見えていた事象を一旦分解し、再び組み立てる作業となる。対話により、参加者の体験は再構成されていた。

2）対話は、問題の見方を変化させる

対話の目的は、すでに表現されている「問い」や「概念」を社会の具体的な文脈に置きなおして、「問題」を掘り起こすことにあり、臨床哲学においても用いられる手法である。

対話のプロセスを振り返ると、訪問開始時は、まちの課題について自分のまちと比較して自分のまちに近づけようとしたり、まちの活性化を経済の復興を中心に考えたりする傾向があり、自分たちの生活に置きなおして、外からまちの問題をながめていた。しかし、対話で「まち、活性化、まちづくり」についてイメージを具体的に表現することにより、言葉のもつイメージは異なっていることに気がついた。イメージは、参加者の生活体験から構成されており、自分たちが固定概念のなかでまちづくりの課題を取り上げていたことに気づいた。その大きなきっかけとなったのは、まちで生きる意味に関する対話であった。そこでは、まちの人びとがルールを受け入れている理由や、自分たちが感じたまちの窮屈さをまちのひとはどのように受け止めているかに思いを馳せた。それは、事象の意味を探りながら現象を直視することであり、立場を変えて事象に入り込むという体験となった。

さらに、まちづくりには集まる時間と場所が必要であるという気づきから、まちはつくるという意識を持っていなくても、まちのひとはまちのために行動し、それがまちの維持力を高めていることに気づいた。まちの問題をそのまちのひとの立場になって「なぜ」、「何が」、「本当にそうか」の視点で考え始めた。この体験から、まちの課題はまちそのものにあるのではなく、課題を捉える側に強く影響されることに気づいた。対話により、参加者は問題に寄り添うことでまちの問題の見方は変化していた。

3）対話は、課題と自分の関係に気づかせる

参加者は、まちと自分の関係について深く考える機会を持っていなかった。しかし、まちという言葉は、個人の自由を制限するものであり、公共を優先させなければならない暗黙のルールのような窮屈なイメージを抱いていた。そして、日常生活の中では自分はまちの影響を受けていないと感じていた。

言葉のもつイメージには、そこに生活する者の価値観が反映されている。まちは日常生活の土台であるが主役ではなく、存在する自分とは切り離して考えやすい。現代に生活する私たちには、干渉したり、干渉されたくない儀礼的な無関心があり、それはまちにも干渉したり、干渉されたくないという思いにつながっているように感じる。ひとは、自分が遠ざけているもののなかに、あえて自分の居場所を見つけようとしないことから、課題を見つけようとはせず、自分とまちは切り離されているように感じていた。

しかし、対話でまちのイメージを共有し、まちに生きる意味を問うことで、参加者は固定概念を外し、まちと自分の関係を考え始めた。まちは生活空間として存在するのではなく、自分の身についている習慣や規範、考え方の枠組みに影響するものであることから、まちと自分が、「公」と「個」という対立関係にあるのではないと気づいた。ひとはまちに生きることでまちにつくられており、まちはひとによってつくられている。対話は、「わたし」がまちにいかに関わっていなかったか、またはまちに関わっていたか、そして、まちはいかにわたしに関わっていたかに気づく機会となっていた。

5．おわりに

はじめに述べたように、現在、「まちづくり」は日本の社会的に重要な課題として取り上げられている。そのため、各地域では、地域福祉の充実を目指した推進ネットワークの形成や意見交換の実施、先駆的取組みの情報発信などさまざまな活動が展開され、システムの構築がなされている。八尾町においても、まちづくりに関する調査は複数行われており、モデル事業等が展開されている。その一例として、一般社団法人 越中八尾観光協会が行った「町並み景観修景整備事業と一体となった伝統文化『越中おわら風の盆』が映えるまちづくり事業」[3] では、問題として伝統文化の保存・育成、継承をあげており、近い将来、空き家の増加や商店数の減少が一段と進行するなど、町内の維持にも厳しい局面をむかえることが予測されている。そして、まちづくりの課題では、住環境の整備や異年齢

層が互いに協力し合い住み続けられる地域社会の仕組みをつくって定住人口を増加すること、および地域資源をPRすることにより交流人口を増加させることの2点が報告されている。つまり、ここでのまちをつくるとは、わたしがこれまでの調査で感じてきたものと同様に、専門職らが介入してまちが活性化するための仕組みをつくることに他ならない。

今回、まちの内にいると問題は見えにくくなり、まちの外にいると固定観念をとおした問題を発見して課題ととらえやすいことを体験した。また、参加者は同じような生活をしていても、「まち」「活性化」「まちづくり」の持つイメージが違うことが対話で明らかになった。ひとは、同じ事象を違う見方で捉えていたり、状況の意味を共有できていないことが日常的にあり、まちの持つイメージの異なり、それはまちづくりの課題を検討するうえでは問題となる。

まちづくりの課題は何か。対話を通して、まちの活性化では、伝統芸能が継続できることだけではなく、生活を楽しむこと、生活の安定を維持すること、衰退する現象による影響を最小限に食い止めることなどの意見が得られた。このように、「個」と「公」は対立関係ではなく、どちらかだけが重視されるものではないことに気づく機会を持つことそのものがまちづくりではないだろうか。まちに住むひとが同じ目標に向かっていくためには、個人的なまちのイメージと社会的なまちのイメージを対話によって作り上げていくことから始める必要があると感じた。

しかし、現在、まちについて、その関心のありかや概念に語りかけ、まちづくりのイメージを具体化する必要性や具体的方法についての研究や報告はなされていない。まちづくりはまちに生活するひとの問題でありながら、その課題の解決主体はまちのひとから離れていることを意味しているように感じる。

対話を通してまちづくりの課題を再考した結果、まちをつくることは、まちのシステムをつくることだけではないことを改めて発見できた。まちづくりは、まちに生活するひとの課題である。主体をまちに置きながら、まちそのものについて「なぜ」「何が」「本当にそうか」という視点を持って問題を掘り起こすことが必要であり、そのために対話は有効であった。今後も、支援を継続的に提供できるネットワークや仕組みづくりについて検討するとともに、まちを歩き、感じ、人びとと交流した体験を対話で再構成することで、まちへの関心のありかたや概念をさぐり、まちの持つイメージを共有できるよう対話をとりいれてまちづくりを考えたい。

注

1　厚生労働省 : 社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方
www1.mhlw.go.jp/shingi/s0010/s1025-1_16.html

2　津村千恵子 : 地域看護学 , 中央法規出版 ,2008.

3　一般社団法人 越中八尾観光協会 : 町並み景観修景整備事業と一体となった伝統文化「越中おわら風の盆」が映えるまちづくり事業
www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/...kou/.../3-7_hokuriku.pdf(2014 年 11 月 03 日アクセス)